セージの贈り物です〟と「九条せんべい」を手渡しまた、この春、福島市を訪れた「もったいないの日本のコトバを世界のコトバへ」と提唱するノーベル平和賞のケニヤのワンガ・マータイさんに「もったいない九条せんべい」を作りアフリカの子に贈りたいことを話し合った。

そして、この秋、友人の中学教師が属する私立女子で創立百二十周年記念事業としてニューヨークから招いた、二十二歳の時占領軍の民生局員として男女同権の憲法二十四条を作成したベアテ・シロタさんに九条せんべいと「二十四条せんべい」を手渡し、二十四条も九条も当時世界の叡智を集め作成したものでだれが作ろうが、いいものはいいので、それを六十年守り続けたのは日本の文化だ。九条改訂に反対し、二十四条、九条を世界へ拡げ伝えて行こうと語り合った。

私は今、十三歳でB29の焼夷弾の雨の下から六十年を生きのび、三人の孫たちがその年齢に近づく姿を見てて、日本国憲法の前文、最高法規、国民の権利等の各条を、英文、中国語、ハングル語での焼印を、余生の仕事として作り続け、遺したいと念ずるようになった。そして私の死後、いつかこの「憲法焼印」を使用し、世界の子ども、女性へ、だれかが大きく広めて行くことを願い、また、「昔、日本に戦争と武力放棄の憲法があったのだ」と、戦乱の中で思い出すような世界にならないことを願う。

（せがわ・みつお　元仙台ベ平連七十四歳）

九条実現　へんろ道中記

野津いさお

私は今、四国讃岐路を遍路姿で歩いています。意見広告賛同呼びかけちらしや『非武装パンフ』などをリュックに詰め、歩きだしてから八日、昨日は知る人ぞ知る捨身ヶ嶽禅定を、鎖につかみながら登って来ました。

今回の遍路は逆打ち（札番号の順に巡るのを順打ち、逆に廻るのが逆打ちと言います）ですので、歩き遍路とは必ず路上ですれちがいます。すれちがった人には立ち話をし、納め札（注）を交換して別れます。私はこれにちらしを添えて渡しました。セリフもだんだん決まってきました。「今の日本は悪い方向に向かっているように思えてなりません。色々の考えがあって然るべきですが、それを許さない国になりつつあるように思います。これでいいのかなとの思いで遍路に出ました。私はある市民運動を手伝っています。詳しいことはこのちらしをご覧になって下さい」と。

反応は区々です。殆どの人が無表情で聞くばかりです。声高に異を唱える人は殆どいません。ある若者は「武力は必要だと思う。武力を持っていなかったためにチベットは中国に侵略された。だけど自分は兵隊に行きたくありません」と最後は他人事になってしまう。

へんろ休憩所を提供しているKさんは、私は自民党宮沢さんの流れを汲む立場だがと前置きして、「北朝鮮のテポドンを言うけれど、誰も見た人はいないし、証拠もない。人が騒いでいる裏で、重要な法案がどんどん通ってしまった。政治となると一筋縄ではいかない。憲法九条の問題も同様奥が深い・・・・」など一時間近く話し込んだ。私の特性納め札（表条！　裏・日本国憲法第九条条文、いずれも木版）を備え付けノートに顔写真付で貼り付けて下さった。（立ち寄る遍路はいやが応でも目にすることになる。）八十番札所国分寺門前の若者たちが自力で立ち上げた食堂や、無言館のポスターを店入口に貼ったうどん屋などではちらし、非武装パンフ、「殺すな」シールを置いて来た。店を出る時、甘酒や麦茶ボトルのお接待を受け、九条実現遍路冥利に尽きるひとときです。

納め札コレクターに無理矢理、車に乗せられたり、四国遍路のために来日した

シアトル在住のアメリカ人と同宿になったり、泊るところがなく、モーテルに泊ったり（ちなみに、通常宿泊料六千円のところ、遍路特別価格四千円というのがいい）、エピソードには事欠かないが、遍路を終えてから、これらのエピソードを主題に、憲法の話をツマにして、日常会話を楽しみたいと考えています。

（注）納め札　参拝後、自分の氏名住所を書いて奉納するもの、これは一種の名刺代りのようなもので、道を尋ねたり、お接待を受けた人に手渡す習慣がある。

（のづ　いさお・本会会員）

《訃報》

自主講座「公害原論」で知られ、多くの反公害運動に大きな影響を与えた宇井純さん（沖縄大学名誉教授）が十一月十一日午前、東京都内の病院で亡くなった。七十四歳。宇井さんは市民意見広告運動の賛同者だった。謹んでお悔やみ申し上げます。

宇井さん、弔辞は書かないよ

井上澄夫

東大工学部（東京都文京区本郷）で宇井純さんに初めて合ったのは、一九七三年だったと思う。ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）が終わりかけていた時期に、鶴見良行さん（故人）を校長とする「アジア勉強会」が続いていて、私は生徒の一人だった。〈ベトナム〉から〈アジアと日本〉の関係に目を開かれた私は、同窓の平山隆貞さん（故人）と共に東大の外にあった自主講座分室を拠点に、日本企業によるアジアへの公害輸出反対運動を始めた。私たちの話を聞いて宇井さんは、即座に協力を約束した。あの笑顔は目に焼きついている。

宇井さんは何より現場の人だった。水俣病の患者さんとの関係が象徴するように、まず公害の被害者に会い現地調査を繰り返した。その成果が工学部の教室で長期にわたって続いた「公害原論」の自主講座に反映されたのだが、講座の講師は多くの場合、公害と闘う漁民や農民、労働者だった。「東大の先生」が支援に駆けつけたことに感動した現地の住民が、「象牙の塔」の階段教室の講師席で、つっかえつっかえ、訥々と思いを語った。だから自主講座は、無数の反公害の活動者を生む豊かな土壌になった。宇井さんの研究室はあたかも「解放区」だった。すべて現場からものを考える宇井さんの作風は「公害原論」に触れた多くの若者たちの生き方に深く染み込んだ。その彼女ら・彼らの多くが今も各地の反公害・反原発住民運動を支えている。

宇井さんは一口にいえば、「義理と人情」の人だった。公害発生源の企業や行政との交渉では厳しかったが、公害に苦しむ人びととのおつきあいは、腰の低い、誠意あふれるものだった。私の活動者としての半生はベ平連から始まったが、十数年にわたる自主講座での活動はベ平連でのそれより長い。ベトナム反戦市民運動と反公害住民運動とが私をつくった。宇井さんは先輩だったが親しい同志でもあった。宇井さんを支えた松岡信夫さんも安川栄さんもすでにいない。宇井さんも逝った。しかし私は宇井さんと長く活動を共にしたことを誇りに思う。できれば宇井さんの生き方に連なりたい。だから、宇井さん、「弔辞は書かないよ」。

（いのうえ・すみお　本会会員）